

## 中学生・高校生の英語学習実態に関するインタビュー調査

### Interview Survey on the English Study of Japanese Junior and Senior High School Students

酒井英樹・工藤洋路・高木亜希子・加藤由美子・福本優美子・津久井貴之

Hideki SAKAI, Yoji KUDO, Akiko TAKAGI, Yumiko KATO,  
Yumiko FUKUMOTO, & Takayuki TSUKUI

信州大学・駒沢女子大学・青山学院大学・ベネッセ教育総合研究所・  
ベネッセ教育総合研究所・お茶の水女子大学附属高等学校

*Shinshu University, Komazawa Women's University, Aoyama Gakuin University,  
Benesse Educational Research and Development Institute,  
Benesse Educational Research and Development Institute, &  
Ochanomizu University Senior High School*

#### Abstract

This article reports the results of an interview survey with 16 junior and senior high school students. A semi-structured interview was carried out with each student for approximately 30 minutes. In addition, a questionnaire was administered. An analysis of the interview protocols revealed nine themes such as (a) traditional note-taking and lessons and (b) gaps between their future career goals and the necessity of English study. Pedagogical implications were made as to note-taking.

#### Keywords

The English Study of Junior and Senior High School Students, Interview Survey,  
Out-of-Class Learning

#### 1. インタビュー調査の背景

本研究の目的は、英語によるコミュニケーション能力を身につけるための学習体系を提案するために、中学生・高校生の学習実態を把握することにより、日本の中高における英語教育の課題を明らかにすることである。本研究に先立ち、ベネッセ教育総合研究所では、2008年度に中学2年生2,967名、中学英語教員3,643名を対象に『中学校英語に関する基本調査』を実施した。この調査では、「文法が難しいと感じている生徒が8割近くに上ること」や「学校外での学習の75%程度が学校の宿題や予習・復習に費やされていること」など、中学生の英語学習に対する意識や学習状況が判明した。本研究では、このような状況の要因を探るために、この量的研究では捉えきれなかった英語学習の実態を、質的研究の手法を用いて明らかにすることとなった。中高生の英語学習の実態や意識をより深く調査するために、学習者側に寄り添った形態での調査が好ましいと判断したため、調査方法として

は、中高生に対するインタビュー調査を用いることとした。

本研究で用いる質的研究方法は、量的な方法とは違い、調査の対象人数が限られるため、得られた結果は個別事例であり、一般化できるものではないが、転用可能なものであると考え。量的調査では、全体的な傾向はわかるものの、個々の学習者の具体的な学習方法などは探ることができない。一人一人の参加者から得られる個別の文脈に即した情報は、日本の中高における英語教育の課題を解決するためには有益なものとする。このことから、本研究では質的手法を採用した。

本研究では、次の図1が示すとおり、中高生の学習行動とそれに影響を及ぼす様々な要因点について、各学習者の個別の文脈に合わせて、その実態を明らかにすることを目的としている。また、インタビューという手法を用いることで、学習者自身の「声」から、中高生が抱える英語学習の課題を見出すことが可能になると考えられる。

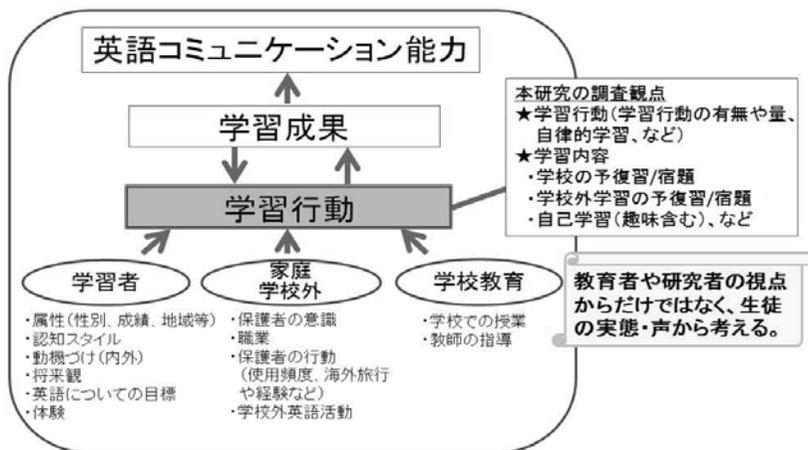


図1 本調査が対象とする要因のイメージ図

## 2. 研究方法

### 2.1 参加者

本調査の参加者は、公立中学校2年生8名、公立高校2年生8名の計16名であった。中学2年生を対象としたのは、前述した2008年度の量的調査の参加者と同じ学年にすることで後の比較が可能になることが主たる理由である。そして、高校2年生を対象としたのは、入学後一定期間が経過し、また、大学受験など特定の目的のための学習をまだ集中的に始めている段階ではないため、高校における英語学習の日常実態が把握できる見込みが高いことが理由である。質的調査方法としてインタビューを用いることから、参加者は16名と多数ではないが、可能な限り参加者の偏りを少なくするために、参加者の性別(中高共に男女4名ずつ)と所属校の地域(中高共に首都圏・首都圏以外4名ずつ)の点を考慮して抽出した。

## 2.2 調査手順

パイロットスタディとして、本調査のインタビュー実施前に、上記の16名の参加者とは異なる中学2年生1名及び高校3年生1名を対象に、プレ調査を行った。プレ調査の結果を参考にして、本調査におけるインタビューでの質問事項や具体的な手順を決定した。ただし、上述したとおり、各参加者の個別の文脈に合わせて英語学習の実態を明らかにすることを目的としていることから、すべての参加者に同一の質問を行うのではなく、半構造化インタビューの形式を用いることとした。インタビューでは、共通の基本的な事項(「授業は普段どんな流れですか」というような授業についての質問、「英語に関わることで、授業外でどんなことをしていますか」というような学習行動に関する質問、「中学2年生に英語でつまづきやすいポイントについて聞いたところ、文法が難しいという回答が最も多い結果となりました。どう思いますか」というような文法についての質問)について質問した上で、参加者の回答により、さらに興味深い部分は、どんどん掘り下げてインタビュアーが適宜次の質問内容を調整していくという手法を用いた。

インタビューは、2013年7～8月に実施され、実施時間は参加者1名につき30～40分であった。インタビュアー1名とサブインタビュアー1名でインタビューに臨み、主としてインタビュアーが質問を行った。インタビュー実施者は、酒井、工藤、加藤、福本であった。インタビューは、参加者の許可を得て録音した。インタビュアーは、インタビュー中に印象や様子なども含めてメモを取った。インタビュー実施後、録音された音声を文字化し、書き起しデータを作成した。そのデータについて、分析を行った。

分析は次の手順で行った。まず、本稿著者である研究者6名が中学生及び高校生1人ずつのインタビューの書き起しデータを読み、コードを作成した(Miles & Huberman, 1994; 谷・芦田, 2009)。それぞれが作成したコードを検討し、共通するコードを作成し、再び各参加者の書き起しデータをコード化した。主たるコードは、表1に示すとおりである。将来観、学校での授業、家庭での学習、その他の学習方法、生徒の印象、アンケートに関する回答についての質問といったコードは、半構造化インタビューを実施する際の質問に対応する。サブコードは、参加者がインタビューの中で回答した内容に基づいたものである。

今回の質的調査は、コードやサブコードの頻度を示すことが目的ではないため、コード化を行った後、さらに内容分析を行った。コード化されたインタビューの抜粋を取り出し、その内容を研究者6名で検討し、参加者16名のインタビューから抽出されたテーマを整理した。

表1 作成されたコード表

コード	番号	サブコード	備考
将来観	1	職業	英語との関係有 英語との関係無
	2	進学	英語との関係有 英語との関係無
	3	してみたい「体験」	
	4	やりたい「学習」	
	5	つけたい「英語力」	
学校での授業	1	言語活動 メカニカルな活動 コミュニケーション活動	
	2	言語材料	
	3	授業形態 ALT	
	4	教材	ワークシート
	5	授業の受け方	ワークブック
家庭での学習	1	学校の宿題(課されているもの)	
	2	学校の授業の予習・復習(課 されていないもの)	
	3	テスト勉強	
	4	通信教育	
	5	習い事	
	6	その他	音楽 動画 本 映画
その他の学習方法	1	兄弟に聞く	
	2	塾の先生に聞く	
	3	辞書を利用	
生徒の印象	1	学校での授業	
	2	先生	
	3	習い事	
	4	家庭での学習	
アンケートに関する回答に ついての質問	1	英語	
	2	海外留学	

### 3. 結果

#### 3.1 事前アンケートの結果概要

インタビューの参加者に対し、参加者の英語学習に関する基礎的なデータを収集する目的、及び、インタビューの内容について、前もって考えを深めてもらう目的で、事前アンケートを実施した。

表2は、中学生に関する事前アンケートの結果を示している。英語の授業の理解度、得意・不得意、成績に関しては、英語が「とても苦手」と答えた生徒や、成績をクラスの下の方と答えた生徒はいなかったが、参加者の回答はばらついた。資格試験について記入をした5人の回答を見ると、英検2級から英検5級までと幅があった。また、8人中、「将来、外国に留学したい」に肯定的な回答をした参加者は3名であった。「将来、英語を使う仕事をしたい」と考えている参加者は半分の4名であった。「将来身につけたい英語力」に対する意識もばらつきがあった。この事前アンケートから、本インタビュー調査の対象者である中学生8名は、英語がとても苦手な生徒は含まれていないものの、一般的なクラスの平均的な生徒であろうと考えられる。

表3は、高校生に関する事前アンケートの結果を示している。高校生8名は、すべて普通科の生徒である。高校生①と⑤が、「やや苦手」と回答しているが、その他の6名は「やや得意」もしくは「とても得意」と回答しており、英語の成績の項目からも比較的英語力のある生徒であることがわかる。留学に対する希望は、2名を除いて、肯定的な回答を得られた。一方、半数の4名の参加者は、「将来、英語を使う仕事をしたい」と思っていないという回答

表2 事前アンケートの結果(中学生)

	授業の理解度 (中学校時点)	英語の 得意・ 不得意	苦手になっ た時 期	英語の成績 (クラス)	「将来、外国に 留学したい」	「将来、英語を 使う仕事をし たい」	将来身につけたい 英語力	資格試験
①女子	ほとんど わかっている	とても 得意	—	上のほう	あまり そう思わない	まあそう思う	英語で仕事ができる くらいの英語力	英検3級 (中1)
②男子	70%くらい わかっている	やや 得意	—	真ん中 くらい	まあそう思う	まあそう思う	英語でよい成績がと れるくらいの英語力	英検5級 (中1)
③男子	ほとんど わかっている	とても 得意	—	上のほう	まあそう思う	まあそう思う	日常会話で困らない くらいの英語力	英検2級 (中1)
④女子	半分くらい わかっている	やや 苦手	中1 後半	真ん中 より下	まあそう思う	まあそう思う	英語でよい成績がと れるくらいの英語力	—
⑤女子	半分くらい わかっている	やや 苦手	中1 後半	真ん中 くらい	あまり そう思わない	あまり そう思わない	英語でよい成績がと れるくらいの英語力	—
⑥女子	70%くらい わかっている	やや 得意	—	真ん中 より上	あまり そう思わない	あまり そう思わない	日常会話で困らない くらいの英語力	英検4級 (中1)
⑦男子	ほとんど わかっている	やや 得意	—	上のほう	あまり そう思わない	あまり そう思わない	海外旅行などで困ら ないくらいの英語力	—
⑧男子	ほとんど わかっている	やや 得意	—	真ん中 より上	あまり そう思わない	あまり そう思わない	英語でよい成績がと れるくらいの英語力	英検4級 (小6)

表3 事前アンケートの結果(高校生)

	授業の理解度 (中学校時点)	授業の理解度 (高校時点)	英語の得意不得意	苦手になった時期	英語の成績 (クラス)	「将来、外国に留学したい」	「将来、英語を使う仕事をしたい」	将来身につけたい英語力	資格試験
①女子	70%くらいわかっている	半分くらいわかっている	やや苦手	高1の夏休み後	真ん中くらい	あまりそう思わない	あまりそう思わない	英語でよい成績がとれるくらいの英語力	—
②男子	ほとんどわかっている	70%くらいわかっている	とても得意	(中1の後半)	真ん中より上	とてもそう思う	まあそう思う	日常会話で困らないくらいの英語力	—
③女子	70%くらいわかっている	70%くらいわかっている	やや得意	—	上のほう	まあそう思う	あまりそう思わない	・よい成績がとれる ・日常会話で困らない ・海外旅行で困らない	英検3級(中3)
④男子	ほとんどわかっている	ほとんどわかっている	とても得意	—	上のほう	まあそう思う	まあそう思う	英語で仕事ができるくらいの英語力	英検準2級(中2)
⑤女子	70%くらいわかっている	半分くらいわかっている	やや苦手	中2の初め頃	真ん中より下	まあそう思う	あまりそう思わない	日常会話で困らないくらいの英語力	—
⑥女子	ほとんどわかっている	ほとんどわかっている	とても得意	—	上のほう	とてもそう思う	まあそう思う	日常会話で困らないくらいの英語力	—
⑦男子	ほとんどわかっている	70%くらいわかっている	やや得意	—	真ん中より上	あまりそう思わない	あまりそう思わない	日常会話で困らないくらいの英語力	英検3級(中3)
⑧男子	ほとんどわかっている	ほとんどわかっている	とても得意	—	上のほう	とてもそう思う	とてもそう思う	英語で仕事ができるくらいの英語力	英検準2級(中3)

をした。「将来身につけたい英語力」は、8名でばらつきがあった。高校生8名は、普通科から参加者を抽出したため、英語力の比較的高い生徒が集まったと考えられる。

### 3.2 インタビューの分析結果

インタビューから抽出されたテーマを表4に示す。

この9つのテーマのうち、「伝統的な予習や宿題」と「将来観と学習行動」を取り上げて、詳細に見ていく。

#### (1) 伝統的な予習や宿題について

まず、ノートの左側に本文を写し、右側に和訳を書くという予習を行っている生徒が多かった(中学生④、高校生①、⑦、⑧)。このようなノートの作成方法は、大学の「英語科教育法」の授業では紹介されない方法である。その他に、中学生については、単語の意味調べ(中学生⑤)の他は、復習として、ワークシート(中学生①、②、③、⑤、⑧)、本文の写し(中学生②、③、⑥)、単語練習(中学生②、⑤、⑧)、一日一頁の提出ノート(中学生⑤、⑥、⑦)などがあつた。高校生については、形式は決まっていなかったが訳が予習として課されたり(高校生②、④)、単語の意味調べが課されたりしていた(高校生②、③、⑤、⑦、⑧)。コミュニケーション言語活動のための予習や宿題ではなく、伝統的な、訳読法に基づく予習や宿題であると考えられる。

表4 インタビューから浮かんできたテーマ

- 伝統的な予習や宿題
  - ・「左に本文，右に和訳」のノートやワークシートをほとんどの生徒が使っている。
  - ・授業中のコミュニケーション的な言語活動と関連していると思われるような学習はほとんど述べられない。
- 子どもの意識 「英語ができる」とは→「長文読解力が高い，文法がわかる」こと
  - ・「話す」「聞く」などは，大学に行ってからやればよい，と考えている。
  - ・英語を実際に使うということを前提とした英語学習観が欠如している。
  - ・話すためには，まずは文法や単語が大切だと強く思っている。
- 学校での勉強が，学校外での学習を規定する割合が大きい
  - ・日々の学習は，学校の予習・宿題，テスト対策がほとんどである。
  - ・中学生だけでなく高校生も，家庭での学習は授業の予習(本文写し，単語の意味調べ，本文和訳など)や小テスト対策の勉強が大部分を占めていると思われる。
- 英語の授業に対する意識
  - ・中学生は授業をおおむね受け入れている。
  - ・授業の中で行うことに，自分なりにその意義を見出そうとして，納得しながら勉強している生徒もいる。
  - ・高校生の中には，今受けている授業を批判的に捉えている生徒もいる。
- 将来観と学習行動——「将来英語を使うこと」と「今やっていること」の乖離
  - ・将来，英語を使って仕事をしたいと考えている一人の生徒が，それに向けて今やるべきことは，「スペリングミスをなくすこと」と答えた。
  - ・英語を使って仕事をしてみたいと思っても，英単語の練習の際に日本語訳も一緒に書いて覚えていたり，本文を書き写すのに2時間かけていたりする生徒もいる。
- 学校外での英語学習を始めたきっかけにはそれぞれのストーリーが見られる
  - ・そのエピソードは，必ずしも劇的なものではない。
  - 例) 修学旅行で外国人に道を聞かれた，小さい頃祖母に ABC の歌を歌ってもらって興味をもった，など。
- 学校での学びに終始している生徒が多そうだが，それでも，小さな自律の芽もある
  - ・同じ予習でも，やり方を自分で考え，選択して行っている生徒もいる。
  - ・自ら英語のプレゼンテーションの番組を見たり，洋楽を聴いたり(歌詞の聞き取りを意識したり，歌詞カードを見たり)という学びもある。
- 先生の影響が大きい。先生との関係性が影響している
  - ・先生の指導通りに学習を行っている生徒が大部分である。
  - ・先生との良好な関係により，英語に対して積極的に取り組んでいる生徒も多い。
- 保護者の影響も大きい
  - ・家庭での学びには，保護者の影響が大きい。

この宿題は，授業の方法を反映しているのではないかと考える。学校の授業に関する印象を表すコメントとして，最初に述べているものを分析した。その結果，教科書，ワークシート・プリント，単語学習について言及をしている中学生が4人いた(②，③，⑤，⑧)。

- ・ああえっと，普段は，せ，先生と，あの教科書の読み合いをしたり，あとはワークシートとかを活用して，えーと，まあ，書く，書いたり，読ん，読んだり話したりするのを基本的に，やっています。(中学生②)
- ・え，んーと，ワークシートとかで進んでくんですけど，あと，ワークシートやって，その

教科書が終わったら、そのページを完璧に覚えて、書けるようにして、単語も覚えてみたい。そんな感じです。(中学生③)

- ・えっと、教科書に沿ってやっています…。【インタビュアー：ちょっとその教科書に沿ってやっているというところをもう少し詳しくおしえていただきたいんですけど】新しい単語の意味とかをやったり、基本文を…。(中学生⑤)
- ・えっと、単語練習をしたりだとか、教科書を進めたりとか。【インタビュアー：単語練習は授業の中でやるんですか？】あ、はいそうです。【どんな形でやるんですか？】えっと、隣の人と単語を言い合ったりとか。(中学生⑧)

その他は、「未来形とか、過去形とか、現在進行形とか、いろいろなこと、をやっています」(中学生①)というような文法に関するコメントや、「ゲームをやったりしながら英語を学びます」(中学生④)のようなゲームに関するコメント、「えっとまあ、まあ、先生の言ったことをノートとかに記録したり、まあ、今後役に立つように受けてます」(中学生⑦)というようなノート記録に関するコメントであった。なお、「いろんな人がいろんな意見言ったり、なんか楽しくやっています」(中学生⑥)というような意見を言う活動に関するコメントは1名だけであった。

高校生による授業のコメントは、比較的分量が多かった。「予習→訳→解説」という流れに言及したもの(高校生①, ②, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧), 「読む」や「音読」に言及したもの(高校生①, ③), ライティングの授業について文法問題を解いていると回答したもの(高校生①, ③, ⑧), 「文法」や「文の構造」に言及したもの(高校生①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑧), 訳に言及したもの(高校生①, ②, ④, ⑤, ⑥, ⑧)があった。なお、「コミュニケーション」に言及したのは1名だけであった(高校生⑧)。

授業については、中学校においても高校においても、訳読が多く、意見を言ったり、コミュニケーションしたりする活動は少ないことがわかった。

## (2) 将来観と学習行動——「将来英語を使うこと」と「今やっていること」の乖離について

中学生8人の中で、将来の職業の具体的なイメージがあったのは3名であった(中学生①, ②, ⑧)。そのうち、職業と必要な英語力の関連性を述べたのは中学生②だけであった。中学生②は、クレイアニメ関係の仕事に就きたいと希望しており、外国に行くことを考えている。生活のための英語や専門用語などの英語の知識も必要であると考えている。

- ・今クレイアニメやってるんですけど、そういうものにやっぱり今憧れをもっているんで、将来あの、外国とかそういう、違う国にも行って、そういうたくさんの技術を学びたいと思っているので、英語を今勉強して頑張ってみようかなと思ってます。(中学生②)

また、中学生①は、事前アンケートで、将来身につけたい英語力として、「英語で仕事ができるくらいの英語力」と述べている。インタビューの中で、ファッション・デザイナーになりたいという希望を述べている。また、そのために「他の人とコミュニケーションできる力」や「相手と話したり聞いたりする力」が必要であると考えている。しかしながら、今後どのようなことをやらなくてはならないかと問われると、「私は、スペルミスとか、そういう、おいしいところ

のミスが多いので、もう少し単語とかも、a とか to とか、そういうつけるとかつけないとか、そういう細かいところまで、しっかりと勉強していきたい」と文法学習について述べている。

一方、中学生と比べて、多くの高校生が将来の職業の具体的なイメージを持っていた(高校生①, ②, ③, ⑤, ⑥, ⑦)。しかしながら、職業と必要な英語力を具体的に述べたのは高校生⑧だけであった。職業と関係なくても、実際に英語を使うことや実際の英語に関わるキーワード(「スヌーピーのお話」, 「ホントの英語」, 「外国の人の」, 「生の英語」, 「外国人の方のプレゼンテーション」など)が多くの高校生には見られた。高校生⑧は、言語学者になりたいと希望しており、学会に参加し、様々な国の言語学者と意見を交換するために英語が必要であると考えている。そのために、学校の授業で、自分の意見をわかりやすく先生に伝える工夫をしたり、テレビのプレゼンテーション番組を視聴したりしている。しかしながら、同時に、ノートの左に本文を書き写し、右に訳を書くという学習を週末に5~6時間かけて行っている。

中学生も高校生も、将来の職業の具体的なイメージと必要な英語力の結びつきが弱いことがわかった。また、必要な英語力を認識していたとしても、伝統的な学習を行っている姿も浮かんできた。

#### 4. 考察及び教育的示唆

分析結果のうち、伝統的な予習や宿題について考察及び教育的示唆を示す。インタビューからわかった「ノートの取り方」は、『第1回中学校英語に関する基本調査(教員調査)』(ベネッセ教育総合研究所, 2008)の結果と合致している。この大規模調査では、予習として出す宿題の内容は、最も回答が多かったものから挙げると、「新出単語の意味調べ」(77.5%), 「教科書本文の書き写し」(63.9%), 「教科書本文の和訳」(21.6%)であった。これは、「入試に役立つように指導すること」に関連している。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること」に関連しているのは、「スピーチや show & tell などの原稿作成や練習」や「日記を書く」という宿題である。スピーチなどの原稿作成や練習を宿題として出すのは 8.8% であり、日記を書かせる宿題は 0.8% であった。大規模調査の結果と、本研究の結果を併せて考えると、本研究の中高生が受けている授業や宿題は、コミュニケーション能力の育成のためのものとは考えられないだろう。

この結果について、2つの点が指摘できる。第一に、この「ノートの取り方」の指導は、大学における教員養成課程ではほぼ扱わないことからであるということである。多くの英語科教育法に関する本の中で家庭学習について言及しているものはあまりない。1つの章を家庭学習にあてている金谷(2009)は珍しい。この章の執筆者の田口徹氏は、「家庭学習」と題する章の中で、特に中学1年生の段階では予習は必要がない(p. 340)と述べている。また、復習としては、内容を定着させるために、(1)学習した言語材料の例文を5回書く、(2)本文を音読する、(3)新出単語を5回書く、(4)ワークブックを解く、などを挙げている(p. 339)。さらに、「学習した言語材料を使って自分自身で考えた文を書いてくるなどの創造的な内容を課す場合もある」(p. 339)としている。つまり、本文を書き写し、和訳をする予習や宿題は、英語科教育法の授業では推奨されていないと考えて良いだろう。

第二に、この「ノートの取り方」は文法訳読法に基づくものであり、コミュニケーションな英語



図を使いながらまとめたもの(図2)と箇条書きでまとめたもの(図3)など生徒によって様々であるが、読んだ英文の概要を英語で伝えるときに参考になるようにまとめるという目的に応じて、生徒自身が考えたノートの場合には、授業において、教師や他の生徒と活動をする中で、新たに理解したことがらを追加できる利点がある。このようなノートは、それを参考にしながら、summary writing (要約を書かせること)もできる。また、ノートを参考にしながら英文の概要を英語で伝えさせ、その音声を録音し、教師に提出させることもできるだろう。

## 5. おわりに

本研究は、中高生の英語学習の実態や意識をより深く調査するために、少人数を対象とした質的分析を行った。結果については、伝統的な予習や宿題と将来観と学習行動に焦点をあてた。考察及び教育的示唆においては、ノートの取り方に焦点をあてた。紙幅の関係で、インタビューの中で出てきた9つのテーマすべてについて詳細な結果及び考察を示せなかったという点で課題も残る。本稿で十分考察できなかったが、「将来観と学習行動の乖離」は、動機づけ研究にとって興味深い結果であると思われる。今後、さらに追究する必要がある。

## 参考文献

- Miles, M. B., & Huberman, A. M. (1994). *Qualitative data analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.). Thousand Oaks, USA: Sage.
- 金谷憲(編集代表) 2009.『[大修館]英語授業ハンドブック中学校編』大修館書店.
- 酒井英樹 2014.「英語の授業改善のための視点」長野県教育指導時報刊行会『教育指導時報』779, pp.18-23.
- 谷富夫・芦田徹郎 2009.『よくわかる質的社会調査—技法編』ミネルバ書房.
- ベネッセ教育総合研究所 2008.「第1回中学校英語に関する基本調査(教員調査)」  
Available: <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3303>  
[2015年2月]